

共感性と統制可能性が援助行動に及ぼす影響¹

芳賀 康朗・青木 天平²

〈要旨〉 本研究は、共感性と統制可能性が援助行動の意思決定に及ぼす影響について検討することを目的とした。多次元共感性尺度（鈴木・木野，2008）を用いて援助意思と相関の高い共感性の因子を探索した結果、他者指向的反応因子と視点取得因子の2因子と援助意思との間に有意な正の相関が確認された。共感性が顕著に高かった群（H群，n=25）と顕著に低かった群（L群，n=21）の援助意思得点を比較した結果、場面や統制可能性の違いに関わらず一貫してH群の援助意思得点がL群よりも高かった。また、援助に要するコストが援助意思に影響を及ぼしている可能性が示唆された。さらにH群よりもL群において統制可能条件と統制不可能条件における得点差が大きかった。これは、共感性が低い人では統制可能性の認知が援助行動の意思決定により大きな影響を与えていることを示唆している。一方、共感性の高い人では、被援助者が統制可能条件にある場合でも、援助行動の動機づけが十分に高い状態にあることが示された。

〈キーワード〉 援助行動、共感性、統制可能性

問題と目的

1. 援助行動の規定因

援助行動 (helping behavior) とは、困窮している他者や集団を助けたり、恩恵を与えたりする自発的行為であり、分与や寄付、ボランティア活動、協力行動などともに向社会的行動のひとつとみなすことができる。外的報酬を期待せずに (松田・土師, 1998)、ある程度の自己犠牲や出費を覚悟しなければならない (高木, 1998) ことから、他者に対する同情や共感といった感情が行動を動機づけていると考えられる。援助の意思決定に影響を及ぼす要因は、性格特性、発達段階、社会的責任感といった個人内要因と、傍観者の存在、出費や報酬、行動の危険性、(被援助者の) 努力、依存の程度などの状況要因の2種類に整理されるが、複数の要因による交互作用は複雑であり、一貫性のある研究結果が得られているとは言えない。本研究では、個人内要因のひとつとしての共感性が援助行動に及ぼす役割を検討することを第一の目的とする。

2. 共感性の構造

援助行動にかかわる個人内要因のひとつである共感とは、他者の感情状態に同期し共有する情動的共感 (emotional empathy) と、その感情状態を客観的に理解する認知的共感 (cognitive empathy) に区別される (梅田, 2014)。情動的共感とは、なかば無意図的かつ自動的に他者と同じ情動状態を共有する現象であり、認知的共感とは、他者視点を取得することで他者の心情を客観的に理解する現象である (大平, 2015)。性格特性としての共感性を測定する場合には、情動的共感と認知的共感を統合し、より多次元的な構造を仮定した心理尺度を用いることが一般的といえる。

共感性を多次元的に測定する尺度に、鈴木・木野 (2008) が作成した多次元共感性尺度 (Multidimensional Empathy Scale : MES) がある。これは、情動反応の指向性 (情動反応が自己または他者のどちらに向かうか) に着目して作成された尺度であり、「他者指向的反応」、「自己指向的反応」、「被影響性」、「視点取得」、「想像性」の5つの下位尺度から構成されている。本研究で検討

共感性と統制可能性が援助行動に及ぼす影響（芳賀・青木）

する援助行動との関連でいえば、他者指向的反応因子（他者に焦点づけられた情動反応）と視点取得因子（相手の立場からその他者を理解しようとする認知傾向）が援助意思と深く関連することが推測される。

3. 援助行動に及ぼす共感性の影響

他者の苦痛や困窮状態に対する共感が援助行動を動機づけている可能性は十分に高く、共感性の高さと援助行動の関連についてはこれまでも多数の研究において検討されてきた。他者に対する共感性と援助行動との間に正の相関があることは、Mehrabian & Epstein (1972) の古典的研究や Eisenberg & Miller (1987) のメタ分析でも報告されている。しかしながら、共感性がダイレクトに援助行動の発現可能性を予測するのではなく、共感によって喚起される反応の種類、援助者の発達段階、状況要因などの影響を受けることも指摘されている。

例えば、共感によって援助者自身に不安や動揺などの苦痛が喚起された場合 (Coke, Batson, & McDavis, 1978 ; Eisenberg, Fabes, Schaller, & Miller, 1989) や、援助者の共感が被援助者への責任感に基づいていない場合 (桜井, 1988) には、向社会行動が促進されないことが報告されている。また Latané & Darley (1970) は、援助者への状況圧力が非常に強い緊急事態では性格特性が援助判断に及ぼす影響は減弱される可能性を指摘している。さらには、状況要因のひとつである被援助者による統制可能性 (controllability) と援助者の共感性との交互作用が援助行動に影響を及ぼすことも報告されている。

4. 援助行動の状況要因としての統制可能性

統制可能性とは、被援助者自身の努力によって困窮状態を回避できる可能性のことである。Meyer & Mulhelin (1980) の質問紙調査では、Weiner (1974) の原因帰属理論の3次元（統制の位置、統制の安定性、統制可能性）を操作した8つの援助場面を設定し、各場面での援助量を比較している。その結果、援助量に影響を及ぼすのは統制可能性であることが確認された。また Weiner

(1980) は、大学生を対象にして質問紙調査を行い、統制可能性を操作した2条件での援助行動を比較している。この調査では、地下鉄のホームから人が転落したのを助ける援助場面が設定され、酒瓶を持ってアルコールの臭いをさせていた人物（統制可能条件）と足を引きずりながら杖をついて歩いていた人物（統制不可能条件）に対する援助意思を尋ねた。その結果、統制可能条件では被援助者に対してネガティブな感情が喚起されて援助行動が抑制され、統制不可能条件では被援助者に対してポジティブな感情が喚起されて援助行動が促進されることが報告された。つまり、援助行動は、統制可能性の判断とそれによって生じる感情の影響を受けることが示されたのである。

統制可能性の判断と共感性との関わりが援助行動に及ぼす影響については、小学校6年生の児童を対象にした渡辺・衛藤（1990）の調査研究でも検討されている。この研究では、共感性が高い児童ほど被援助者の統制可能性をより詳細に吟味するため、統制可能性の程度に応じて援助行動量に差が生じるとの見解が示されている。さらに、小学校3年生と5年生の児童を対象にした松田（1995）の研究では、援助者自身の状態（空腹・満腹）、共感性、統制可能性の3要因が援助判断（分配するパンの数）に及ぼす影響が検討されている。3要因の交互作用の分析からは、援助者が空腹の場合には共感性のみが援助判断に影響を与え、援助者が満腹の場合には統制可能性が判断に影響を与えたことが報告されている。この結果は、援助者自身の状態によって援助行動に影響を及ぼす要因が異なってくる可能性を示唆している。

5. 本研究の目的

本研究では、以下に示す3つの問題に着目し、援助者の共感性と被援助者の統制可能性が援助意思に及ぼす影響を確認し、詳しく分析していく。

問題の第一点は、援助意思と相関する共感性の構成要素についてである。同情、思いやり、心配、苦悩といった共感的感情が援助行動の動機づけとなる可能性は高いと考えられるが、本研究では鈴木・木野（2008）の作成したMESを用いて共感性を測定し、援助意思と相関の高い要素を特定していく。第二点は、援助場面における状況要因の影響である。日常生活での援助行動には、危

険度、緊急性、援助コスト、被援助者との関係などの状況要因が影響を及ぼしている。本研究では複数の状況要因を操作して3つの援助場面を設定し、各場面での援助意思を比較する。第三点は、共感性の発達段階に関する問題である。共感性の発達速度は一定ではなく、その構造も児童期から青年期にかけて多次元化していく。しかし、青年期における共感性と援助行動との関係を検討した研究は数少ない（溝川・子安, 2015）。本研究では大学生を対象として調査を実施し、小学生を対象とした渡辺・衛藤（1990）や松田（1995）の研究結果と比較を行う。

方 法

1. 調査協力者および調査方法

調査協力者は、三重県の私立K大学で2018年度に心理学の概論的講義を受講していた1年生から4年生までの学生120名。調査協力者の平均年齢は19.9歳（18歳～23歳）であった。調査協力者には調査目的を説明した上で質問紙を配布し、約20分間の回答時間をとった。回答を始める前に、すべての質問に回答する義務はないこと、回答結果の匿名性は守られること、調査目的以外に回答結果が使用されることはないことを説明した。回答済みの質問紙はその場ですべて回収された。

2. 調査内容

調査で使用した質問紙は、フェイスシート、MES（鈴木・木野, 2008）、援助意思に関する質問の3部構成であった。フェイスシートでは、調査目的、データの処理方法、個人情報の保護について説明し、回答について諾否のチェック、回答を承諾した場合には、調査協力者自身の学年、年齢、性別の記入も求めた。

MES（鈴木・木野, 2008）は、自分自身の共感性を評定する尺度で、「被影響性（5項目）」、「他者指向的反応（5項目）」、「想像性（5項目）」、「視点取得（5項目）」、「自己指向的反応（4項目）」の下位尺度から構成されていた。各質問項目への回答は、「とてもよくあてはまる（5点）」、「ややあてはまる（4点）」、「ど

共感性と統制可能性が援助行動に及ぼす影響（芳賀・青木）

「ちらともいえない（3点）」、「あまりあてはまらない（2点）」、「全くあてはまらない（1点）」のいずれかを選択する5件法で行わせた。

援助意思に関する質問では、3種類の援助場面と2種類の統制可能性を組み合わせた6つの架空のストーリーを用意した。援助場面に関しては、松井(1981; 1990)や高木(1998)が行った援助状況の分類を参考にして緊急場面と日常場面の2場面を選定し、さらに貸与場面を追加した。

緊急場面とは、被援助者が生死に関わる危険な状況に直面しており、自らの力ではその危険を回避することが困難であり、なおかつ援助行動にも大きな危険とコストがともなう場面である。本調査では、駅のホームから線路へ転落しそうになっている他者を救助する場面を緊急場面として設定した。日常場面とは、落とし物を交番に届けたり、道をおしえたりするような場面で、日常生活で遭遇する機会が多く、援助に要するコストが皆無か非常に小さい場面である。本調査では、落とした書類を拾ってあげる場面を日常場面として設定した。貸与場面とは自分のお金や文具を他者に貸すような場面で、日常場面と同様に遭遇機会は多いものの、約束の不履行や返却の延滞によって援助者にコストが発生する可能性がある場面である。本調査では、他者のバス運賃を一時的に立て替える場面を貸与場面として設定した。

統制可能性については、被援助者自身の努力や心がけで当該の困窮状態を回避することができる場合を統制可能条件、不可能な場合を統制不可能条件とした。以上の6条件のストーリーは表1に示した。

6条件のストーリーを読ませた後に、調査協力者自身はその場面に遭遇した場合の援助意思について「絶対しない（1点）」から「絶対する（7点）」までの7件法で回答を求めて、それを援助意思得点とした。さらに、そのように回答した理由について自由記述形式で回答を求めた。

データ解析には、清水(2016)のフリー統計分析ソフトHADを使用した。

表1 調査に用いた架空ストーリー

場面	統制可能性	ストーリー
緊急	統制可能	あなたは駅のホームで電車を待っています。あなたの近くにいた人は、足元がふらつき、今にも駅のホームから転落する危険があります。この人は、かなり酔っ払った状態で、アルコールの臭いをプンプンさせていることにあなたは気づいていました。
	統制不可能	あなたは駅のホームで電車を待っています。あなたの近くにいた人は、足元がふらつき、今にも駅のホームから転落する危険があります。この人は、足を引きずりながら杖をついて歩いていることにあなたは気づいていました。
日常	統制可能	あなたは廊下を歩いています。あなたの前を歩いていた人が手に持っていた書類を落としてしまいました。この人は、片手で書類を持ち、もう片方の手でスマホゲームをしながら歩いていたことをあなたは見ていました。
	統制不可能	あなたは廊下を歩いています。あなたの前を歩いていた人が手に持っていた書類を落としてしまいました。この人は、書類の他にも荷物をたくさん抱えており、重たそうにしていたことをあなたは見ていました。
貸与	統制可能	あなたはバスに乗っています。あなたの前に乗った人が、小銭がなくて困っています。この人は、お金の無駄遣いをする人であることをあらかじめ、あなたは知っていました。
	統制不可能	あなたはバスに乗っています。あなたの前に乗った人が、小銭がなくて困っています。この人は、一人暮らしで身寄りがなく、貧しい生活をしていることをあらかじめ、あなたは知っていました。

結 果

1. 場面と統制可能性が援助意思得点に及ぼす影響（図1）

場面の違いと統制可能性の違いが援助意思に及ぼす影響の全体像を把握するために、3つの場面（緊急・日常・貸与）と2種類の統制可能性（統制可能・統制不可能）を組み合わせた6つのストーリーにおける援助意思得点の平均点を比較した。図1にはストーリー別の平均援助意思得点と標準偏差値を示した。場面（3）と統制可能性（2）の2要因の分散分析を行った結果、場面の主効果 ($F(2, 238) = 24.75, p < .001$) と統制可能性の主効果 ($F(1, 119) = 156.28, p < .001$) のいずれも有意であったが、2要因の交互作用は有意ではなかった ($F(2, 238) = 0.73, ns$)。場面の主効果が有意だったので、多重比較を行ったとこ

共感性と統制可能性が援助行動に及ぼす影響（芳賀・青木）

ろ、日常場面における平均援助意思得点が他の2場面と比較して有意に高かった ($p<.001$)。また、貸与場面と緊急場面の間には有意差は認められなかった。

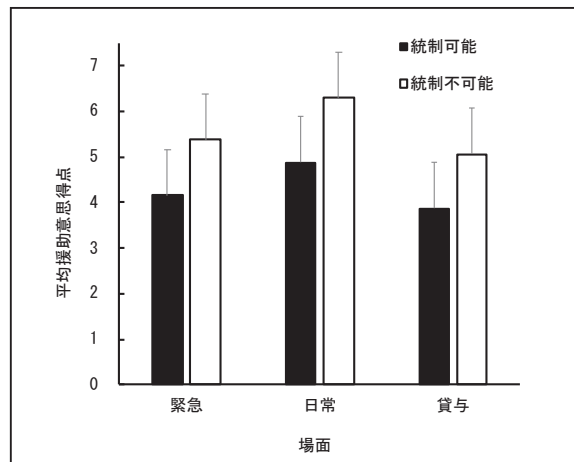


図1 ストーリー別の平均援助意思得点

2. 援助意思判断に関する自由記述回答（表2）

表2には、援助意思判断に関する自由記述回答の中から代表的なものを選び、意味が変わらない程度に表現を整えた上で、肯定的な回答（援助する）と否定的な回答（援助しない）に分類して示した。なお、回答内容が肯定的であったか否定的であったかという判断は、同じ質問に対する援助意思得点の高低に基づいて行ったものではない。

第一の特徴は、統制可能条件では「自業自得」との援助に対する否定的な態度を示す回答が場面の違いを問わず得られたことである（緊急場面で4件、日常場面で9件、貸与場面で8件）。また、少数ではあったが、「自己責任」、「因果応報」、「本人が悪い」といった被援助者の責任や過失を指摘する回答も統制可能条件ではみられた。第二の特徴は、統制不可能条件において、「かわいそうだから」（貸与場面で9件、日常場面で5件、緊急場面で2件）、「大変そうだから」（日常場面で15件）、「同情できる」（貸与場面で6件）などのように被援助者の心情に共感を示す回答が多く見られたことである。第三の特徴は、

共感性と統制可能性が援助行動に及ぼす影響（芳賀・青木）

肯定的な回答の理由として、「放っておけないから」、「(援助しないと) 罪悪感を感じるから」、「(援助しないと) 後味が悪いから」、「後悔したくないから」といった援助者自身の心情に帰属させる回答が統制可能性の違いを問わず見られたことである。第四の特徴は、「人としてあたりまえだから」、「見て見ぬふりはできないから」といった内在化された社会的規範に帰属する回答が散見されたことである。

表2 援助理由についての自由記述回答の例

	緊急場面	日常場面	貸与場面	
統制可能	肯定的(援助する)	人命に関わるから 転落する前に助けたい 目の前で死なれたくない 転落するのは見たくないから 転落されると後味が悪い 助けないと罪悪感を感じる 助けなかったら後悔する 周りの人の迷惑になるから 電車が止まると迷惑だから 電車が遅れると迷惑だから 援助が必要だと判断した	人として当然だから 通行の邪魔になるから 無視したらバツが悪い 素通りはできない 拾うぐらいならする 簡単なことだから 大切な書類かもしれないから 反射的に拾ってしまう 自分も同じ経験があるから 困っている人を放っておけない 無視するのはかわいそう 自分に損はないから	少額・小銭なら貸す 知り合い・仲良しなら貸す 確実に返してもらえたら貸す 困ったときはお互い様 人を助けるのはあたりまえ 周りの人の迷惑になるから 自分以外に誰もいなければ貸す 仕方がない かわいそうだから 頼まれたら援助する 貸すしかない 自分が降車できなくて困るから
	否定的(援助しない)	自業自得 落ちて自己責任だから 飲み過ぎた本人が悪い 他の誰かが助けてくれる 酒臭い人・酔っ払いが嫌い 絡まれたら面倒くさい 関わりたくない 駅員に伝えて任せる 自分のデメリットが大きい 助けるのは危険がともなう	自業自得 自己責任 因果応報 スマホをいじっている人が悪い 歩きスマホをしているから 自分自身の不注意だから 手伝う勇気がでない 自分にメリットがない	自業自得 返ってこないかもしれない 無駄遣いする人には貸さない お金を持っていないのが悪い 同情できない・同情の余地なし お金の大切さを知ってほしい 信用できない その人のためにならない 人見知りだから お金を貸す勇気はない
統制不可能	肯定的(援助する)	人を助けるのはあたりまえ 見て見ぬふりはできない 危なくて放っておけない 転落したら危ないから 転落したらかわいそうだから 目の前で死なれたくない 転落するのを見たくないから 転落されると後味が悪い 助けないと罪悪感を感じる 電車が遅れると迷惑だから 身体が不自由だから助けるべき 身体が悪くないから その人は悪くないから	大変そうだから 困っているから 危ないから 苦労しそうだから 拾うのは当たり前 見て見ぬふりはできない 放っておけない・見過ごせない かわいそうだから 通行の邪魔になるから 無視したらバツが悪い 冷たい人だと思われたくない 助けると喜ばれるから 自分も同じ場面で助けてほしい	知り合い・仲良しなら貸す 確実に返してもらえたら貸す 周りの人の迷惑になるから貸す 少しでも人助けをしたい 貧しいとわかっているから 生活状況を理解しているから 同情できる・同情の余地あり 人を助けるのはあたりまえ 自分以外に誰もいなければ貸す かわいそうだから 後悔したくないから 困ったときはお互い様 恥をかいてほしくないから
	否定的(援助しない)	知らない人と関わりたくない 知らない人だから 助けるのは危険がともなう 助けられる自信がない 助ける勇気がない 声をかける勇気がでない 余計なお世話かもしれない 駅員が助けるだろうから 他の人にまかせる 援助の仕方がわからない	手伝う勇気がでない あまり近づきたくない	知らない人なら貸さない 返してくれるかわからない お金を貸すメリットがない お金を貸す勇気はない 自分には関係ない

3. MES の下位尺度得点と援助意思得点との相関

援助意思と相関が強い共感性の要素を特定するために、MES 尺度の下位尺度別の得点と6つのストーリーにおける援助意思得点の合計点との相関係数を求めてその有意性について検討した。援助意思得点と最も高い有意な相関を示したのは他者指向的反応因子であり ($r=.447, p<.001$) 次いで視点取得因子であった ($r=.387, p<.001$)。この2因子以外の3因子と援助意思得点の相関は相対的に低く、被影響性因子では $r=.100$ ($p<.277$)、想像性因子では $r=.141$ ($p<.125$)、自己指向的反応因子では $r=-.182$ ($p=.047$) であり、いずれも1%水準で有意とはいえなかった。

4. 共感性高群と共感性低群の抽出

相関分析の結果、援助意思と相関の高いMESの要素は他者指向的反応因子と視点取得因子であることが確認された。そこで、共感性と援助意思との関連性について詳細な分析を進めるために、他者指向的反応因子得点と視点取得因子得点の合計点（最高点は50点）を求め、その点数の差が大きい調査協力者群間の比較を行うこととした。他者指向的反応因子得点と視点取得因子得点の合計点順に調査協力者を並べ、第3四分位数（40点）より高い得点であった25名と第1四分位数（33点）より低い得点であった21名を抽出した。そして、それぞれの調査協力者群を共感性高群（以下H群とする）と共感性低群（以下L群とする）とした。H群の平均共感性得点は42.72点（SD=1.86）、L群の平均共感性得点は28.57点（SD=2.77）であり、両者の差は有意であった ($t(33)=19.95, p<.001$)。

5. 共感性の高さと場面の違いが援助意思得点に及ぼす影響（図2）

各場面の統制可能条件と統制不可能条件の援助意思得点の合計点を従属変数とし、共感性の高さ（2）と場面の違い（3）を独立変数とした2要因の分散分析を行った。その結果、共感性の主効果 ($F(1,44)=31.44, p<.001$) と場面の主効果 ($F(2,88)=9.31, p<.001$) がいずれも有意であったが、2要因の交互作用は有意ではなかった ($F(2,88)=0.61, ns$)。場面の主効果について多重比

共感性と統制可能性が援助行動に及ぼす影響（芳賀・青木）

較を行ったところ、日常場面における援助意思得点が他の2場面よりも有意に高いことが示された ($p<.001$)。これらの結果から、H群はいずれの場面でもL群よりも援助意思得点が高く、2群とも日常場面における援助意思得点が他の2場面よりも高いことが確認された。場面間の得点差傾向は、図1に示した全調査協力者を対象とした分析結果と共通するものであった。

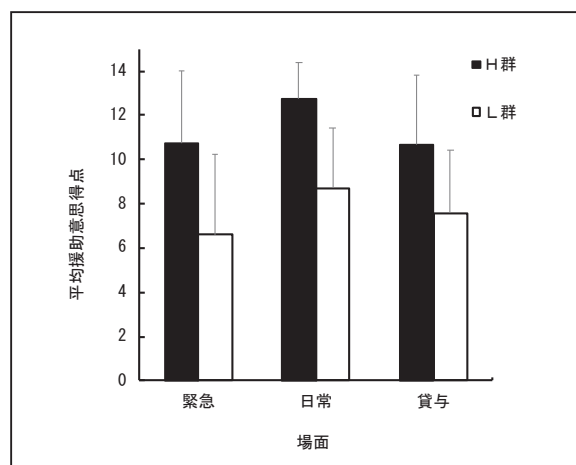


図2 場面別の平均援助意思得点

6. 共感性の高さと統制可能性が援助意思得点に及ぼす影響（図3）

各統制可能性における3場面の援助意思得点の合計点を従属変数とし、共感性の高さ(2)と統制可能性の違い(2)を独立変数とした2要因の分散分析を行った。その結果、共感性の主効果 ($F(1,44) = 31.44, p < .001$) と統制可能性の主効果 ($F(1,44) = 59.27, p < .001$)、および共感性と統制可能性の交互作用 ($F(1,44) = 8.70, p < .01$) が有意であった。交互作用の分析を行った結果、統制可能条件における群差 ($F(1,44) = 39.60, p < .01$) と統制不可能条件における群差 ($F(1,44) = 13.74, p < .01$) のいずれもが有意であった。さらに、H群における統制可能性の差 ($F(1,44) = 11.28, p < .01$) とL群における統制可能性の差 ($F(1,44) = 56.69, p < .01$) のいずれもが有意であった。以上の分散分析の結果と図3に示した結果を合わせて解釈すると、統制可能性の違いにかかわらずH群の援助意

共感性と統制可能性が援助行動に及ぼす影響（芳賀・青木）

思得点のほうが高く、統制不可能条件よりも統制可能条件における群差のほうが大きかったといえる。さらに2群とも統制可能条件よりも統制不可能条件のほうが援助意思得点は高かったものの、条件間の差はL群の方が大きかった。

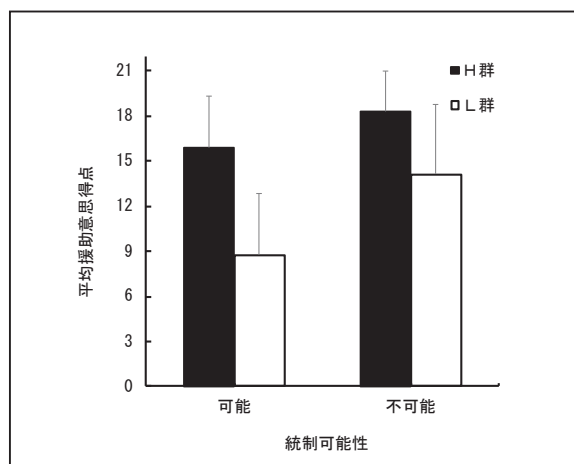


図3 援助可能性別の平均援助意思得点

考察とまとめ

図1に示した結果から明らかなように、本研究では統制可能性の帰属が援助意思に影響を及ぼすことが確認された。この結果は、統制不可能条件における援助行動の動機づけが統制可能条件よりも促進されることを示しており、Ickes & Kidd (1976) や Meyer & Mulhelin (1980) の古典的研究や、小学生児童を対象とした渡辺・衛藤 (1990) や松田・土師 (1997) の研究とも整合するものである。表2の統制可能条件における援助に否定的な回答では、被援助者自身の過失や責任を指摘するケースが多く見られたが、こうした原因帰属は不快な感情を喚起させ、援助行動の動機づけを抑制するのであろう。一方、統制可能条件における肯定的な回答では「危ないから」、「かわいそうだから」、「大変そうだから」、「苦労しそうだから」といった記述が見られたが、このような原因帰属は被援助者に対する共感や同情を喚起させ、援助行動を促進させ

るのであろう。さらに統制可能性の違いを問わず、援助に肯定的な回答の中には、被援助者の状況や心情ではなくて、援助者自身の心情（罪悪感を感じる、後味が悪い、後悔する）や都合（迷惑になる、邪魔だから）に言及するものが散見された。このことは、援助行動が被援助者の困窮を解消するためだけでなく、援助者のネガティブな感情や不都合を解消するためになされる可能性を示唆している。

平均援助意思得点の場面差について見てみると、日常場面における得点が最も高く、緊急場面と貸与場面の間には有意差は確認されなかった。この結果は、援助に関わるコストの軽重の観点から解釈することができるだろう。3場面を比較すると、援助者自身が怪我や落命する可能性があるのは緊急場面である。また、貸与場面では、少額ではあるものの、自分の所持金を持ち出さなくてはならないし、返済されないこともありうる。これらの2場面と比較すると、落とした書類をとってあげるだけの日常場面ではコストはほとんどない。ただし、コストがほとんどない日常場面であっても統制可能性の影響は確認できることから、援助コストよりも統制可能性の帰属が優先して援助の判断がなされるのかもしれない。

MES 尺度によって測定された共感性の下位因子と援助意思得点との相関を分析した結果、5つの下位因子のうち他者指向的反応因子と視点取得因子の2因子において、援助意思との有意な正の相関が確認された。情動と認知の指向性（他者指向・自己指向）を明確に弁別することを目的にして作成されたMESでは、他者指向的反応因子と視点取得因子はいずれも他者指向的共感性として位置づけられている。他者指向的反応因子は他者に焦点づけられた同情や配慮などの情動的反応と対応しており、視点取得因子は他者の立場から他者自身の状態を理解しようする認知的反応と対応している（鈴木・木野, 2008）。本研究で得られた結果は、援助行動は他者指向的共感性によって動機づけられることを示唆しているといえる。ただし、共感性と援助行動の関係を扱った他の研究では、両者にまったく相関が認められない場合（桜井, 1988）や弱い相関しか認められない場合（原田, 1990；山際・堀, 1991）もある。したがって、共感性の多次元性、共感性とそれ以外の性格特性との関連、共感性の測定方法

などを考慮しながら検討をすすめる必要がある。

他者指向的反応因子と視点取得因子から構成される他者指向的共感性において顕著な差があるH群とL群を抽出し、場面間での援助意思得点を比較した結果（図2）、全調査協力者を対象とした分析結果（図1）と同様に、2群のいずれでも日常場面における援助意思得点が他の2場面よりも有意に高かった。この結果は、援助者自身の他者指向的共感性よりも、援助にともなうコスト差が意思決定に強く影響を及ぼすことを示している可能性がある。

他者指向的共感性の高さが異なるH群とL群における統制可能性の影響を分析した結果、共感性と統制可能性の間に有意な交互作用が確認された。図3からは、統制可能条件と統制不可能条件における共感性の影響は統制不可能条件において減弱し、L群における統制可能性の影響はH群よりも大きいことが読みとれる。さらに、統制可能性の主効果はいずれの分析でも有意であったことから、本研究の調査協力者（大学生）では、6つのストーリーにおける統制可能性は正確に弁別されていたことは明らかである。これらの結果を総合すると、他者指向的共感性と統制可能性との関係については、次に述べる二つの解釈が可能であろう。ひとつは、他者指向的共感性が低い人では、統制可能性の帰属が援助意思の決定に対してより大きな影響を及ぼすため、統制不可能条件では援助の動機づけが高まるということである。もうひとつは、他者指向的共感性が高い人では、統制可能性の違いにかかわらず援助行動への動機づけがもともと高いため、統制可能な状態であってもお節介や先回りのような援助行動が発現し、統制可能性の影響が相対的に縮減するということである。

本研究で対象としたのは想定場面における援助行動の動機づけであり、それが実際の援助の遂行とは一致しない可能性も考えられる。畠中・石津(2014)は、質問紙調査においては共感性と向社会的行動の遂行意思との間に相関が認められたものの、実際の向社会的行動の遂行は共感性によって動機づけられていない可能性を指摘している。援助行動の動機づけと援助の遂行との関連については、本研究でも扱ったさまざまな状況要因の影響を検討していく必要があるといえる。

引用文献

- Coke, J. S., Batson, C. D., & McDavis, K. (1978). Empathic mediation of helping: A two-stage model. *Journal of Personality and Social Psychology*, **36**, 752-766.
- Eisenberg, N. & Miller, P.A. (1987). The relation of empathy to prosocial and related behaviors. *Psychological Bulletin*, **101**, 91-119.
- Eisenberg, N., Fabes, R. A., Schaller, M., & Miller, P. A. (1989). Sympathy and personal distress: Development, gender differences, and interrelations of indexes. *New Directions for Child and Adolescent Development*, **44**, 107-126.
- 原田純治 (1990). 援助行動と動機・性格との関連 実験社会心理学研究, **30(2)**, 109-121.
- 畠中あゆみ・石津憲一郎 (2014). 共感性が向社会的行動に及ぼす影響—社会的望ましさ尺度を用いて— 富山大学人間発達科学研究実践総合センター紀要, **8**, 1-6.
- Latané, B. & Darley, J. M. (1970). *The unresponsive bystander: Why doesn't he help?* New York: Appleton Century-Crofts. (竹村研一・杉崎和子 (訳) (1977). 冷淡な傍観者：思いやりの社会心理学 プレーン出版)
- 松井豊 (1981). 援助行動の構造分析心理学研究, **52**, 226-232.
- 松井豊 (1990). 援助行動の意思決定における情報探索過程の分析 実験社会心理学研究, **30**, 91-100.
- 松田君彦 (1995). 共感性と援助行動に関する一研究 日本教育心理学会第37回総会発表論文集, 423.
- 松田君彦・土師由美子 (1998). 共感性と援助行動に関する一研究 鹿児島大学教育学部研究紀要人文社会科学編, **49**, 159-169.
- Mehrabian, A. & Epstein, N. (1972). A measure of emotional empathy. *Journal of Personality*, **40**, 525-543.
- Meyer, J.P. & Mulhealin, A. (1980). From attribution to helping: An analysis of the mediating effects of affect and expectancy. *Journal of Personality and Social Psychology*, **39**, 201-210.
- 溝川藍・子安増生 (2015). 他者理解と共感性の発達 心理学評論, **58(3)**, 360-371.
- 大平英樹 (2015). 共感を創発する原理 エモーション・スタディーズ, **1(1)**, 56-62.

共感性と統制可能性が援助行動に及ぼす影響（芳賀・青木）

- 桜井茂男（1988）．大学生における共感と援助行動の関係—多次元共感測定尺度を用いて— 奈良教育大学紀要, **37**, 149-154.
- 清水裕士（2016）．フリーの統計分析ソフト HAD：機能の紹介と統計学習・教育, 研究実践における利用方法の提案 メディア・情報・コミュニケーション研究, **1**, 59-73.
- 鈴木有美・木野和代（2008）．多次元共感性尺度（MES）の作成—自己指向・他者指向の弁別に焦点を当てて— 教育心理学研究, **56**, 487-497.
- 高木修（1998）．セレクション社会心理学 7人を助ける心—援助行動の社会心理学—サイエンス社
- 梅田聡（2014）．第1章共感の科学認知神経科学からのアプローチ 梅田聡（編）コミュニケーションの認知科学 2 共感 岩波書店 pp.1-29.
- 渡辺弥生・衛藤真子（1990）．児童の共感性及び他者の統制可能性が向社会的行動に及ぼす影響 教育心理学研究, **38**, 46-51.
- Weiner, B. (1974) . *Achievement motivation and attribution theory*. New Jersey : General Learning Press.
- Weiner, B. (1980) . A cognitive (attribution) -emotion-action model of motivated behavior: An analysis of judgments of help-giving. *Journal of Personality and Social Psychology*, **39**, 186-200.

註

- 1 本研究は第2著者が令和元年度に皇學館大学文学部コミュニケーション学科に提出した卒業論文のデータを再分析し、加筆・修正をしたものです。
- 2 現所属：岐阜県中津川市立蛭川中学校教諭

共感性と統制可能性が援助行動に及ぼす影響（芳賀・青木）

A Study on the effects of empathy and controllability on helping behavior.

Yasuaki Haga & Tenpei Aoki

Abstract

The purpose of this study was to investigate the effects of empathy and controllability on decision making of helping behavior. Multidimensional Empathy Scale (Suzuki & Kino, 2008) was used to identify the empathic factors that were highly correlated with intention to help. The results confirmed that Other-Oriented Emotional Reactivity factor and Perspective Taking factor were significantly correlated with helping-intention score. As a result of comparing the helping-intention score between the group in which empathy was significantly high (Group H) and the group in which empathy was significantly low (Group L), the helping-intention score of group H was consistently higher than that of group L regardless of the difference in scenes and controllability. It was also suggested that the cost of help may have an impact on the intention to help. Furthermore, the difference in the scores between the controllable condition and the uncontrollable conditions was greater in group L than in group H. This result suggests that, among people with low level of empathy, cognition of controllability has a greater effect on decision making for helping behavior. On the other hand, people with a high level of empathy have a sufficiently high motivation for helping behavior even when the recipient is in a controllable condition.

Keywords : helping behavior, empathy, controllability